

---

# 美奈子

ましまろん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

美奈子

### 【Zマーク】

Z9386A

### 【作者名】

ましまろん

### 【あらすじ】

美奈子がふとした事で性格が微妙に変わってしまうストーリーとその高校で起こる変なストーリー。

## プロローグ

私は美奈子。

普通の中学生と言いたい所だけど、スポーツ万能＆成績優秀の順風満帆な生活を送っています。

そんな私も卒業。

有名高校進学なんて余裕。

でも、頭が良いからなんて無にして、自分が受けたい高校に進学でもしよう。

特に理由は無いけど。

## 試験を受ける

試験当日…

「予習は完璧だわ。」

美奈子は、軽いステップごとある高校へと向かつた。

桜岡高校

創立二十年、若い高校ながら全国大会に出場する部活は数知れずの高校。

「うーんね。」

美奈子は、周りを見渡した。

「広いーーー！」

美奈子は、さらに声をあげた。

「ここで決まりだわーーー！」

あまりに嬉しそぎて、美奈子は涙が出ていた。  
その涙を拭い、校舎へと入つて行つた。

「あ～～～。」

美奈子は思った。

早くここに来ようとした。

テスト開始のチャイムが鳴り、美奈子はすらすらと問題を解いていった。

試験終了…

「楽勝、これで入学決定だわ。」

美奈子は、チーターのように走つて帰つていった。

数日後

「私つて馬鹿だ。」

美奈子は、試験を受ける回数を間違えていた。

「チャンスはもう無いの？」

美奈子は、完全に気を落としていた。

「あなた何してるのー?」

גָּדוֹלָה

「エリは学校よ。制服を着てないから、エリがエリで泣いているのか、わけを聞かせてくれないと困るのよ。」

「はい…。試験に落ちたので、未練があつてここに一つの間にか来てたんです。」

「どうして落ちたの？」

「浮かれ過ぎて、2つ試験受けてなくて、途中で帰つてたんです。」

先生は笑いをこらえていた。

「へえ、そりなんだあ。」

「馬鹿にしてません?」

「そそそそんなわけないでしょ。あーそうだ、推薦つて知ってるかなあ？」

「推薦：？」

「うちの高校では、特技を見せてもらつてアピールしてもらひ、『由比推薦』なんていうのがあるんだけど受けてみない?」

「やつたーーー！」

気が変わり過ぎだと先生は思った。

そういう事で美奈子は、自己推薦とこつやつを受けてみる事にしたのである。

入学式にて（前書き）

登場人物 美奈子、あけみ、告白する男

## 入学式にて

桜岡高校の試験に失敗してしまった美奈子は、自己推薦でバク宙を披露し見事受かった。

登校日：

「今日も気持ちいい朝ね。」

学校到着

「どんな生活送れるか楽しみだわ。」

華やかな想像をしながら、美奈子は元気良く駆けていった。

始業式終了

「あれ？ もしかして。」

「美奈子！」

「あんたも！」に決めたの！？」

「美奈子も！」に入学してたんだあ。ふ〜ん。」

彼女の名は、『あけみ』。

美奈子のライバルであり、良き友。  
同じく、運動神経抜群の優等生。

「美奈子、試験途中で帰るなんてありえないよ。」

「知つてたの?」

「別に、まあせいぜい頑張つて。じゃあ。」

「待ちなさいよ!」

「はー。恥ずかしい。」

美奈子は、自分の天然さに失望した。

帰り

「みんな元気な人ばかりで安心したわ。」

あけみに逢つた事などは、すっかり忘れていた。

ふと、後ろから誰かが美奈子の肩を叩いた。

「んー?」

「いやー、かわいいなあ。付き合つてください。」

「何よ、突然。レーティに失礼じゃない。」

「ダメなら友達で、よろしくお願ひします。」

「お断りします。私のタイプじゃないし、突然言われるなんて無理です。」

「いやいや、冷たすぎます。セイを何とか。」

「しつこいなあ。」

「お頼み申します。」

「じゃあ、私に勝つたらね。」

「へー? 何の勝負で?」

「カラーテで、勝負よ。」

「まあ、いいですけど…。」

「こくわよー。」

10秒後

「…あ。」

「文句無しね。 セヨナリ。」

美奈子は、空手の有段者である。全国大会にも出ており、優勝経験は無いものの、下手して相手するものではない。

こうして無事に入学出来たのだが、明日変な事に巻き込まれるとは、美奈子は知るよしもなかった。

## 運命の日（前書き）

登場人物 美奈子、橋本直子、小倉ゆう、友達になりたい男

## 運命の日

入学式終了後で『あけみ』とこの女にバタリと出会って、突然告白する男も現れたりと美奈子はこの先どうなるのやら…。

学校生活一日目、運命の日…

「担任は誰になるのかしら、イケメンだといいんだけどなあ…。」

浮かれている。

「わがまま言つちやいけない。華の高校ライフをエンジョイしなくちや。」

また、浮かれている。

朝礼

「みなさん、桜岡高校の印象はどうですか。」

(女人かあ…)

「学級委員を決めたいと思うのですが、誰か立候補する人はいますか?」

「はーー。」

「おな前は?」

「橋本直子です。まつきつて出来る自信があります。」

(言ひちやつてるよ)の人)

「じゃあ決まりですね。」

「では、先生の血口紹介から。私の名前は小倉ゆう、『ゆうづさん』と呼んでね。」

「スリーサイズは上から……と、後は」想像にお任せしますね。」

(えー?)

(はー?)

「あと、先生の事知りたかったら、個人的に話を受け付けます。早い者勝ちだから、男の子は特にチャンスだからね。」

(こきなり、何を言つんですかー?)

「悪い冗談はいいまで、じゃあこの後、体育館に集まつてください。いいですね。」

『はーい。』

この後も先生の悪い冗談が5分続いた。

一段落終わり、美奈子は帰宅する事にした。

その時

「昨日、会いましたよね？」

「また懲りずに来たの？」

「どうしても、友達になりたくて。」

「ふうん。」

「お願ひします。」

「もう一度忠告するけど、無理なものは無理、だから帰つて。」

「携帯電話番号だけでも渡わせて~。」

「仕方ない、ちょっと痛いけど我慢してね。」

美奈子は男から少し離れ、跳び膝蹴りを決めて着地しようとした瞬間、タイミングをちょっと外し、男と共に倒れた。

数時間後…

「あのー。」

「あつ。」

(すゞく私のタイプ...)

「大丈夫ですか?」

「好きです、付き合ってください。」

「えー?ええー、もちろん。」

美奈子は、どこを打ったの分からぬが、さつき断つた男を好きになってしまったのでした。

## 見事カップル成立（前書き）

登場人物 美奈子、横島一樹、横島一樹の母、江戸崎初美

## 見事カップル成立

美奈子は、何かのはずみで男と接触し、しつこく男を逆に好きになってしまった。この先どうなるのやら…。

「あー、よく寝たなあ。」

この男は、『横島一樹』。美奈子に告白した張本人である。

「昨日は良い思いしたなあ。まさか、告白されるなんて、確かに蹴られたところまで覚えているのになあ。」

「とにかく、学校行かなきや。あ、それと、名前を聞くの忘れてた。ショウがない、行つて会わなくちゃ。」

「何独り言、言つてんだいー学校に遅刻するよ。」

「はいー分かりました。」

横島は浮かれ過ぎていた。

「昨日会つた人、どこにいるのかなあ。」

美奈子は、横島を捜すため必死になつて捜している。

「どうしたん、美奈子ちゃん。」

美奈子に声を掛けたのは、入学式ですぐ友達になつた『江戸崎初美』。

「元気が取り柄の女の子だ。」

「昨日す』ーく素敵な人に会つて、探しているんだけど。」

「美奈子ちゃん、少し変わった感じがするけど、何か頭でも打つたの?」

「いいえ。そんな事より知らない?」

「うへん…、どんな人なのか分からなによ。」

「特徴は…。はつ!」

「どうしたの?」

「特徴が無い。」

美奈子は、夢中になりすぎてしまふまで分からなかつた。

帰宅

「結局、搜せなかつたわ。」

「彼女はどうにこるんだ?」

「あ！」

「やつと会えたね。」

「うん。。。」

「あの、名前は。」

「私は美奈子って言います。」

「僕は横島一樹です、よろしく。」

こうして二人はお付き合いを始めたが、横島は何故付き合えたか知らない。

見てしまつた…（前書き）

登場人物 美奈子、横島一樹

見てしまった…

美奈子と横島は、一週間経つても仲が良く、順調に交際していた。

しかし、横島は美奈子のある異変に気付き始めるのであった。

「どう高校生活は。」

「まあ、順調かな。」

「一年生になつて、じいじがビーチこう場所かいろいろ分かつてくれるから。」

「横島くん、一年生だったなんて知った時、幸せって思つたんだから。」

「年上が好きなの?」

「別に。好きじゃないけど。  
(んー?)」

「あ、そつなんだ…。あはは。」

「それに、女にだらし無い男は、一本背負いで決めてやりたい。」

(まづい…。)

横島は、女にだらし無いのだ。

「どうしたの、顔色悪いよ。」

「変な人。」

横島は黙つてゐる事にした。

帰  
り

「横島くさん。」

「美奈子ちゃん、いつもありがとうございます。毎日帰り一緒になんて、うれしいすぎるよ。」

「じゃあ帰ろつか。

「ああ。」

その時！？美奈子が足を滑らせた。

「危ない！」

「よかつたあ～。」

「何よーーーのエッチー！」

美奈子の強烈なパンチが、横島の頭に死ぬほど直撃した。

「襲われるかと思った。前の奴じゃない！」

横島は何故なんだと、意識薄れゆく中眩いた。

「帰ろ、帰ろ。」

ヒューネン、ドン。

「すいませーん。野球ボール取つてください。」

「はーい。」

「イタタタタ、硬式ボールは痛い。ん！？横島くん！大丈夫、怪我は無い？」

「何とか。」

「横島くんに当たつて、次に私に当たるなんて、結構運が悪いね。」

横島は見てしまった。

美奈子が、変わる所を…。

美奈子は、頭に何か衝撃を加えると少し性格が変わるのだ。だが変わったのは、横島を好きになる事だけである。

横島は今後、美奈子を守る事に決めたのである。なぜなら、今後彼女が出来る自信が無いからだ。

横島の闘いは、今始まつたばかりだ。

氣を使う男（前書き）

登場人物 美奈子、横島一樹

## 氣を使う男

登校時

横島は慎重になっていた。

「美奈子さんをしつかり守らないと、いつ殴られるか分からない。」

「横島くーん。」

「来ましたよ。慎重に慎重に。」

「何か独り言、言つてない?」

「あはは。綺麗だねって言いたかっただけだから。」

「横島君にそう言わると、体がほてつちゃう。」

(美奈子さん、イメージが崩れるような事、言つのやめて下さない)

「急に深刻になっちゃったけど、私の顔に何か付いてる?..」

「いいや、見とれただけさ。」

「素敵。」

一人だけの周りから見ると寒い会話は、学校が始まるまで続いた。

下校

「今日、美奈子さんはいないみたいだな。」

「横島くん、一緒に帰ろうつか。」

(しまつた会つちやつた)

「またー。深刻な顔は似合わないよ。」

「まあ、いろいろあるよ。」

「何か悩み事でも?」

(何か逃げる方法を探さないと…)

「さては、勉強。」

「まあ、そんなもんだよ。」

内容が無い会話が続く二人、横島は作戦を実行に移した。

「ハグツ。」

「横島くん?」

「おー、腹がよじれそうだ。」

「大丈夫？」

「持病が出たようだ。」

横島は頭が悪かつた。

これぐらいしか言えなかつた。

「あたし、こんな事にも氣付かないなんて、薄情ものだわ。」

美奈子も、頭を打つて性格も変わつていいので、横島と同レベルだつた。

(今のうちに逃げるぞー。)

「動いちゃダメ。」

(なんて力だ…)

「じつとしてないと、命に関わる事なんだから。」

(持病なんて言つんじゃなかつた…)

横島は自分の馬鹿さに呆れ果てた。

その後、病院にまで行くはめになり、恥ずかしい思いをしたのだった。

「横島くん、大事にいたらなくてよかつた。」

言つまでもなく、美奈子は気付いてなかつた。

なんとか切り抜けたが、これ以上下手に動くとまよいので、横島は普通に接する事にした。

この後、あけみと初対面する横島にて、更なる試練が来ようとしていた。

あけみ登場（前書き）

登場人物 美奈子、横島、あけみ

## あけみ登場

横島は考えていた。

「美奈子さん、 どんどん変になつていい。」

横島は心配だつた。

「ヤレで何してるの?」

「はい?」

「変に上を氣にしてたけど…。」

「いえ、 考え事をしていたもので…。」

「じつとしたら、 変質者に間違われるよ。 気をつけなさい。」

「はい。」

職員は去つて行つた。

「やばいな、 聞かれてたかなあ。」

横島は美奈子に詳しく述べしよひと思つた。

「美奈子さん。」

「な~に。」

美奈子の横には、 すらりとした綺麗な女性がいた。

「この人は?」

「あー、 私の友達の『あけみ』 つていつの。」

「よろしくお願ひしますね。」

「はい。」

「美奈子、ちよつと聞いていい?」

「いいよ。」

「ボーイフレンド?」

「うん、そうだけじ。」

「美奈子にしては、珍しく頼りなさやつ人と付き合つてるね。」

横島は、いきなり会つて失礼だなと言おうと思つたがやめた。  
「あけみ、あなたには分からないと思つの。」

「ふ~ん。」

「横島くんじめんね。」

「いや、そんな…。」

するとあけみは、急に困る質問をした。

「ど~好きになつたの?」

「全部です。」

「ふ~ん。」

横島はあまりの興味の無さに少し苛立つていた。

「何か私に文句がありそつな顔してるとか?」

見抜かれていた。

「美奈子にどれぐらいふさわしい男か、証明してもらいましょうか。」

「突然、急に何を言い出すんですか?」

「空手で勝負よ!」

急に展開が、思わぬ方向にいつてしまつた。

「始めましょうか。」

横島は、空手を少し経験していたので、負けるわけにはいかなかつた。

「始め!」

なぜか美奈子が審判になつて掛け声をかけた。

横島は甘く見ていた。

あけみの素早い動きと蹴りの強さに、よくお笑い芸人がするリアクションをとってしまった。

「あうつ。」

「弱い。期待してたんだけど、やつぱり思つた通りだつたわ。」

「大丈夫、横島くん？」

「美奈子、いいのその男で？」

「いいの。彼氏無しのあけみなんかに分かるわけないんだから。」

「聞き捨てならないわよ、その言葉。」

「まだろくに一回も付き合つた事がないあなたなんかには。」

「いいわ。勝負して目覚めさせてやるわ。」

「望むところよ！」

さらに急展開になつた。

美奈子とあけみの真剣勝負は、一瞬で決着がついた。

「やつぱり強いわ、美奈子。」

「負けるわけにはいかないのよ。」

「美奈子の意志は固いのね。」

「本当は好きなんでしょう、横島くんの事が。」

「気付いてたのね。」

横島は目を疑つた。

「私から離そうとして、後で付き合つなんて、そんなに簡単にはいかない事なの。」

「分かつてると、そつするしかなかつた。ごめんね、横島さん。」

「いいえ…。」

結局、急展開続きで横島はぐつたりしていた。  
美奈子と付き合う事は大丈夫なのかと。

横島はこれから大変になる事を知るよしもなかつた。

完

事情により、ここでお話を終了させていただきます。  
読んでいただきありがとうございました。

作者  
ましまろん

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9386a/>

美奈子

2011年1月12日14時48分発行